

# 資源管理に必要な情報の提供事業 -

## 漁海況予報関連調査

久野正博・藤田弘一・山田浩且・沖 大樹

### 目的

本県沿岸の漁況および海況の調査研究を行い、漁海況情報を迅速に漁業関係者に提供すると共に、その情報を解析して漁海況予報を行い、漁業資源の合理的利用と漁業操業の効率化を図り、漁業経営の安定化に資する。

### 方法

熊野灘 19 測点および伊勢湾 16 測点において、毎月 1 回の海況調査を調査船「あさま」で行った。漁況は主要漁業協同組合から統計資料の入手および電話による聞き取りによって収集した。収集した漁況・海況データは取りまとめて解析し、漁海況速報として毎週 1 回発行した。

### 結果の概要

詳細については平成 18 年度漁況海況予報関係事業結果報告書（漁海況データ集）で報告したので、以下は概要を記す。なお、漁況については「資源評価調査」で報告した。

#### 1. 黒潮流路

黒潮流路は、2005 年 10 月下旬から N 型が続き、大きく変動することなく、2006 年 8 月頃まで経過した。その間、4 月には黒潮小蛇行が潮岬を通過したが、遠州灘沖での流路変化は小さかった。9 月以降は伊豆諸島～房総半島沖で変動が大きく、C 型および D 型を含む N 型基調で 2007 年 1 月中旬まで経過した。11 月に九州南東沖に形成された黒潮小蛇行は徐々に東進し、1 月下旬に蛇行東端が潮岬を越えて、W 字状（B 型 + C 型）となった。2 月中旬に黒潮小蛇行の本体が潮岬を通過し、2 月下旬には典型的な B 型となった。3 月後半に蛇行北上部が伊豆列島線を越えて、C 型へ移行した。

潮岬沖の黒潮は、黒潮小蛇行の通過した 4 月中旬頃一時的に 20～30 マル程度離岸したものの、4 月末以降は 2007 年 1 月前半まで接岸した状態が続き、大きく離岸することはなかった。1 月下旬に小蛇行の東端が潮岬を越えて 50 マル程度の離岸、2 月中旬には蛇行本体の通過に伴って 60 マル程度の離岸となり、3 月下旬には再び接岸した。

#### 2. 熊野灘の海況

熊野灘沿岸の水温は、4 月は上旬に御前崎沖の黒潮北

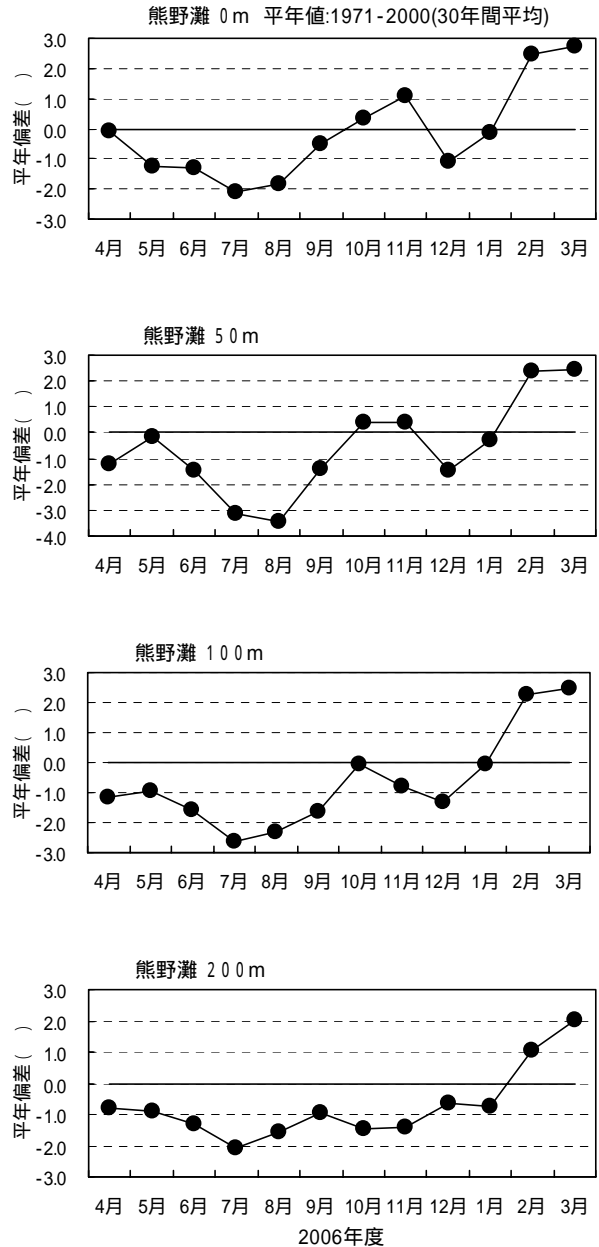


図1. 熊野灘沿岸定線観測における 17 測点平均水温の 2006 年度 年々偏差

縁から暖水流入、中旬以降は小規模な黒潮内側反流の流入によって、表層では一時的に年々並み～やや高め

となったが、下層では前年度からの低水温傾向が持続した。5月～6月は顕著な暖水流入が見られず、表層を含めて低水温傾向が顕著となった。7月は20m以深の水温が平年より2～5も低めで、多くの測点で7月としては過去最低を記録した。8月には気温の上昇もあり表面の低水温は解消したものの、下層では記録的な低水温が持続した。9月以降は黒潮に変化が見られるようになり、黒潮系暖水が表層を中心に流入するようになって極端な低水温は解消傾向となった。表層では9月に、50mでは10月に、100mでは11月に平年並みに回復したが、200mでは11月まで低水温傾向が持続した。12月上旬には大王崎南東沖から暖水流入が強まったものの、熊野灘沿岸では1月中旬まで冷水に覆われた状態が続き、低水温基調で経過した。1月下旬に黒潮小蛇行の東端が熊野灘に流入し、熊野灘では高水温傾向に転じた。2月7～8日の観測時には表層水温18℃前後の暖水に覆われ、一部の測点では2月としては観測史上最高水温を更新した。2月下旬には黒潮内側反流が強まり、さらに升温した。3月1～2日の観測においては平年より2～4℃高めで、表層の多くの測点で3月としては観測史上最高水温を更新した。

浜島の定地水温は、4月末は14℃台で平年値を3℃近く下回った。6月下旬に気温の影響で平年を1℃程度上回った他は、平年並み～低め基調で経過した。10月中旬以降は平年並み～やや高め基調で経過した。1月上旬は平年を1℃前後下回る低水温であったが、顕著な暖水流入があった1月中旬以降は平年より2～4℃程度も高めで経過した。暖水流入に加えて暖冬の影響もあり、2月上旬と3月上旬には過去60年で同日の最高水温を更新した日が多かった。

### 3. 伊勢湾の海況

伊勢湾の水温は4月～6月まで平年より低め基調で推移した。5月～6月は表面で平年値を上回る測点もあったが全体としては低めで、平年より2℃以上低めの測点も見られ、全体的な低温化傾向は8月まで続いた。9月以

降、表層では平年並み～やや高めとなったが、底層での低め傾向は10月まで継続した。11月に入ると底層を含めて全般にかなり高めとなり、以降は平年より高め基調で推移した。1月は平年並み～やや高め、2月～3月は高め傾向が続いた。

底層におけるD.O.(溶存酸素量)低下の発生時期はほぼ平年並みで、貧酸素水塊(D.O.2ppm以下)の出現は6月観測時から確認された。6月の3ppm以下の範囲の面積はほぼ平年並みで、規模が大きかった前年同期よりも狭かった。その後も底層における貧酸素水塊は11月まで観測された。5月からの長雨による表層塩分の低下や外海水の中層貫入等によって2006年の貧酸素水塊の形成は著しく、その値も0に近い無酸素状態が継続してみられた。また、分布の範囲は湾口から知多半島に沿って流入した外海系水に押されるような形で湾奥から三重県側に偏って分布していることが多かった。冬季になっても12月、1月と湾奥の底層でD.O.の低め傾向が残り、2006年夏秋季の貧酸素水塊の形成が著しかったことをうかがわせた。

白子の定地水温は、5月上旬にほぼ平年並みになった他は4月～5月中旬に平年よりやや低め～低めで推移した。5月下旬以降はほぼ平年並みとなり、6月下旬には平年よりもやや高めとなった。7月には水温の上昇が停滞したため、7月下旬には平年より2℃以上低めとなったが、8月中旬以降は平年並み～やや高めで推移し、10月には水温が下降せずに停滞したため、平年値よりも高めとなった。11月に入りようやく水温は下降し、12月～1月初めは平年値にやや近付いたものの、冬季は暖冬の影響を強く受けて平年よりも高めで推移した。2月28日～3月6日は、観測開始以来過去49年において同日の最高水温を更新した。

### 関連報文

三重県(2007):平成18年度漁況海況予報関係事業結果報告書(漁海況データ集)。